

一橋大学における「学問史」編纂の歴史

江夏 由樹

(一橋大学経済学研究科特任教授)

1. はじめに

一橋大学は 1975 (昭和 50) 年に創立 100 周年を迎えた。その記念事業として、大学は「年譜」、「学制史資料」、「学問史」、「座談会記録」等の編纂・刊行を相次いで行った。また、如水会学園史刊行委員会の手によっても、一連の学園史資料の刊行が積極的に行われた。その歴史は、本ニューズレター所収の大場高志「一橋大学の学園史刊行の歴史」にある通りである。そうした記念事業のなかで、「一橋の学問」とはどのようなものであるのかという問いは、たえず、議論の中核に据えられていた。

一橋大学創立 150 年の記念事業においても、「学問史」の編纂は重要な課題となってくるであろう。但し、この半世紀、一橋大学の規模、所属する研究者の数も拡大・増加し、学問の専門化・細分化・多様化が進んでおり、各研究科・研究所で行われている研究の流れを「一橋の学問」として有機的にまとめていくことは必ずしも簡単ではない。そうした状況のなかで、これまでの一橋大学における「学問史」刊行の歴史を跡付けること、また、そこで議論されていた事柄を明らかにしておくことは、創立 150 年を迎える「学問史」編纂の準備作業として無駄ではないと考える。

2. 一橋大学における学術誌等の刊行の歩み (創立百周年記念以前を中心として)

一橋大学の歴史には、「実業教育」中心の商業学校・高等商業学校から、アカデミズムを基礎とする大学への昇格を目指し、その実現を果たしていった奮闘の記憶が脈々と流れている。まさに「研究」を勝ち取ってきたのである。何度かの廃校の危機に直面しながらも、「専攻部」の設置、「ベルリン宣言」、「申西事件」などを経て、東京商科大学の設立に至った苦難の道については、多くの先人が学園史にまとめてきた。「商科大学設立ノ必要」と題された「ベルリン宣言」(1901 年)はヨーロッパに留学していた石川巖、石川文吾、神田乃夫、滝本美夫、津村秀松、福田徳三、志田鉦太郎、関一らによって起草されたものであった。すでに佐野善作は 1900 年に帰国していたが、その後、彼らは続々と留学を終え、母校の教壇に立つなかで、一橋におけるアカデミズムを醸成し、大学昇格運動の中心的な役割を果たしていった。

こうした若き研究者のアカデミックな活動が、全体として、どのように一橋の学問



を形成していったのかということ論じることは容易でない。そこで、本稿では、少々論点は異なるが、大学の学術誌、学問史等の刊行の歴史という点から、その一端をとらえてみたい。「表 一橋における学術誌・学問史の刊行」にあるように、1921年、大学の研究機関誌として、『商学研究』が創刊された。大学への昇格を果たした1年後である。これにより、東京商科大学は、教員の研究成果を定期的に公刊する大学としての基盤を確立した。創刊号の執筆陣は、三浦新七、下野直太郎、中村進吾、上田貞次郎、井浦仙太郎、高垣寅次郎、井藤半彌、石川文吾、佐野善作らであった。以後、東京商科大学の教員にとって、この『商学研究』は貴重な研究成果公表の場の一つとなっていた。大学への昇格が実現し、そのアカデミズムの基盤構築のために、まず、学術誌の刊行がなされたことに注目できよう。その後、1932年には、大学の研究機関誌は、研究年報として、『商学研究』『法学研究』『経済学研究』に再編されていった。これらの研究年報の執筆者、論文の内容から、当時の商科大学の研究動向をうかがうことができよう。なお、研究年報の刊行は、制度的な変遷・拡充を遂げつつ、各研究科の学術誌として現在にいたっている。

研究年報に加え、新制一橋大学の時代になると、経済研究所の『経済研究』（1950年創刊、季刊）、また、英文ジャーナルである各学部・研究科・エリアの *Hitotsubashi Journal*（1960-1961年創刊）のシリーズも刊行された。これら研究誌も一橋大学の研究成果の発信の場として重要な役割を果たしている。すでに一橋大学が1960年代初頭から英文誌を刊行していたことは注目に値する。

こうした研究誌の刊行に加え、一橋の学問を考えるうえで、東京商科大学が自らの研究成果を公表する場として、記念論文集をしばしば刊行していたことも忘れてはならない。まず、1925年には『(創立)五十周年記念論文集』、1936年には『(創立)六十周年記念論文集』が刊行された。前者には、上田貞次郎を筆頭に26名の錚々たる顔ぶれの教員が研究論文を寄稿している。また、後者には、三浦新七、上田貞次郎、根岸侷等をはじめとする27名が著者として名を連ねている。この論文集が一橋会の編纂・刊行であったことから、教員だけでなく、そこには学生の論文も含まれていた。学生も研究活動の一翼を担った、当時の商科大学の雰囲気を感じることができよう。『六十周年』の「刊行に際して」にもあるように、論文集は一橋の歴史・学問を強く意識して編纂されたものであり、これら記念論集は当時の「一橋の学問」を論じるうえでの貴重な材料となる。

さらに、新制一橋大学の設立後にも、記念論集の編纂が行われた。1950年には『一橋大学創立七十五周年 記念論集』が刊行されたが、これは『一橋論叢』の特集号「一橋大学75周年記念号」（第24巻第2-5号）を一冊にまとめたものである。この特集号については、後述する。さらに、1955年に『一橋大学創立八十周年 記念論集 上



巻』『同 下巻』が刊行された。「第一篇 経済学」「第二編 社会学」「第三編 商学」「第四編 法学」「第五編 文化諸科学」からなる本書には、村松恒一郎、上田辰之助、山口茂、田上穰治、山田勇ら 32 名の教員が寄稿している。その巻頭言「創立八十周年記念論集のために」のなかで、中山伊知郎は「(本書) のなかの一つ一つの論文が、一橋の学問の進歩の歴史を示す指標として評価されるであろう。」①と記している。

上述の研究年報、英文ジャーナル、記念論文集等は基本的に個々の教員の研究発表の場であった。これに対し、「一橋の学問」の総合化を目指した研究月刊誌が、1938 年に創刊された『一橋論叢』であった。その創刊の経緯は、例えば、増田四郎「一橋論叢創刊前後の思いで」(『一橋論叢』第 100 巻 4 号) などに詳しい。白票事件後の重苦しい雰囲気の中で、上田貞次郎学長のイニシアチブのもと、山口茂、増地庸治郎、中山伊知郎、井藤半彌、猪谷善一を創立委員として刊行された『一橋論叢』は、以後、一橋大学の学問を結集させる「学内一般の論壇」としての役割を果たしていった。例えば、創刊当時、毎号に掲載された「学界展望」は一冊にまとめられ、『文化諸科学学界展望』として第一輯(1939 年)から第四輯(1942 年)まで刊行された。その執筆者は東京商科大学を代表する研究者であり、その内容は当時の関係諸学界全体の状況を論じたものとして、大きな学問的影響力を有していたという。この『一橋論叢』の刊行は戦後の一時期中断したものの、70 年近く存続し、残念ながら、2006 年に廃刊となった。

『一橋論叢』が「一橋の学問」を語るうえで貴重な材料となることは、この月刊誌が、様々な機会をとらえて、「特集号」を組んできたことから確認できる。その一つとして、著名な教員を記念する特集号の刊行があげられよう。例えば、1941 年 1 月には「故上田学長追悼号」(第 7 巻 1 号)が刊行され、上田貞次郎自身の遺稿、また、上田辰之助、太田哲三、増地庸治郎、山中篤太郎の論考が収められている。また、新制一橋大学の設立直後には、「三浦新七博士記念論文集」(第 22 巻 1 号)が刊行された。寄稿者である村松恒一郎、上田辰之助、中山伊知郎、高橋泰蔵、山田雄三、上原専禄、根岸侷、村松祐次、山口茂などの名前を見るならば、そこに当時の「一橋の学問」の奥深さと広がりをつかえることができよう。その後も、教員の退職・追悼等を記念する形での特集号の刊行は機会あるごとに続けられていった。そこには、当該教員と縁の深かった研究者の論文、本人の年譜・著作目録等が収められていた。また、学問分野ごとの、あるいは、共通テーマを設定した特集号の編纂も盛んであった。そのなかでは、例えば、「人と学説」「学問の現状と動向」といったシリーズの企画も行われていた。近年には、新入生等をも読者として想定した「学問への招待」という特集号も刊行されていた。様々な形をとった特集号の一冊一冊に、一橋の学問を牽引した教員・講座を中心とした研究の世界を確認することができる。

『一橋論叢』が「一橋の学問」を中心課題に据えた特集号を組んでいたことは大いに



注目できる。1950年には「一橋大学75周年記念号」が4回に分けられて刊行された(第24巻第2号、同3号、同4号、同5号)。各号は商学、経済学、法学、社会学の特集号としてまとめられ、上田辰之助、杉本栄一、田中誠二、上原専祿らが各号の巻頭論文を記し、各号最後に教員による座談会の記録が収録されている。「一橋商学の75年」「一橋経済学の75年」「一橋法学の75年」「一橋社会学の75年」と題された座談会の記録から、当時の教員が一橋の学問、その歴史をどのように考えていたのか、かれら自身の言葉から捉えることができる。さらに、1955年には『一橋大学創立八十周年記念号 一橋学問の伝統と反省』が刊行された。学長・中山伊知郎の巻頭言「一橋論叢記念論集に寄せて」に続き、商学、経済学、法学、社会学の29名の教員が各研究分野における「一橋学問の伝統と反省」を記している。そこに収められた各論文は文字通り「学問の伝統と反省」を意識して記されたものであり、一橋の学問史を論じるうえで、この特集号が貴重な材料を提供していることは疑いない。各著者が投げかけた問題提起は現在の一橋人にとっても新鮮である。この点については後述する。

3. 一橋大学における学問史の編纂（創立百周年を中心として）

すでに述べたように、「一橋の学問」について、『一橋論叢』は1950年と1955年にその特集号を刊行した。一橋の学問を意識した論文集等の刊行は以前より行われていたが、「一橋の学問」そのものを全学的に問う企画は、これらの特集号が初めてであったといえよう。新制一橋大学の成立から間もない時期、中山伊知郎学長の「八十周年記念号」巻頭言に示された、「一橋の学問が何であるかの一面は、先ずこの過去を顧みること」、そして、「ここに展開された吟味と反省とが、一橋の学問の新しい時代を示す」②という言葉に、当時の一橋人の意気込みを読み取ることができよう。

その後の学問史の編纂は、一橋大学学園史編集委員会『一橋大学創立百年記念 一橋大学学問史』(1982年)まで待たねばならなかった。創立百周年を記念して刊行された本書は、「商学」「経済学」「社会・歴史学」「一般教育」の各編からなり、雲嶋良雄、馬場啓之助、勝田有恒、古賀英三郎、山川喜久男をはじめとする66分野の76名の教員が寄稿していた。まさに全学をあげて本書の編纂に取り組んだことがわかる。なお、1986年、本書は一部項目(体育学)、各学部・研究所の歴史についての座談会記録等を追加し、『一橋大学学問史』(一橋大学学園史刊行委員会)として増補・刊行された。これらの『学問史』により、1980年代の一橋大学の学問状況を具に捉えることができる。この時期までに、一橋大学の規模が急速に拡大し、学問の専門化・多様化が進行していたことを、そこに確認することができる。

他方、1985年、如水会の内部機構であった一橋大学学園史編纂委員会によっても学



問史の刊行が行われた。同委員会『一橋の学風とその系譜 1』『同 2』は、「学問に結実した先生方の人格と背景、生き方と雰囲気、求真力と影響力など、いうならば人間味のある学風とその系譜について、この際残しておくべきものがあるのではないか」③という趣旨からまとめられたものであり、大変興味深い内容となっている。1981 年以来、「一橋大学の学問を考える会」（新井俊三主宰）が毎月開かれていたが、本書は、その講師として迎えられた一橋教員、その関係者の講話の内容を中心にまとめられている。増田四郎、山田雄三、高橋長太郎、木村元一、石川滋、末松玄六、吉永栄助、瀬沼茂樹、高橋泰蔵をはじめとする 33 人の現・元教員等が、一橋の「経済学」「商学」「社会・歴史学」「法学」「文学」「学風」について興味深い議論を展開している。本書は『一橋大学学問史』と対をなしており、当時の一橋大学の学問、学風、教員の姿をとらえるうえで欠くことのできない資料となっている。

4. これまでの学問史編纂から見えてくるもの

すでに述べたように、大学の規模が拡大し、学問の専門化・多様化が進む中で、今後、一橋大学の学問を全体としてとらえていくことは簡単ではない。しかし、この問題は、すでに、新制一橋大学設立の頃から大学の研究者の間では強く意識されていたようである。例えば、前述の『一橋学問の伝統と反省』のなかで、増田四郎は次のように記している。

「一橋大学というものが、四つの学部に分かれて、若い人たちがはじめから学部を異にして勉強するという傾向がつよくなって来ると、専門化の方向のみが進んでも、社会科学の総合的見地からする問題意識というものが、漸次にうすめられて来る危惧なしとしない。この危険は、現在の段階では高商または商科大学以来のスタッフが多いため、どうにかいとめられているが、これから各学部別に学んだ新しいスタッフが入って来ると、益々ばらばらとなる危険がある。或る特殊テーマの徹底分析に精進することは大いにのぞましいところであるが、その仕事が一橋大学という伝統ないしは社会科学の全体との関連において、どういう位置をもっているのかを忘れてしまったような特殊研究、すなわち最初から狭い枠にはめられた専門研究の歴史であっては、われわれの特色を活かしてゆくことは出来ない。」④

増田の言葉は「歴史学」について述べたものであるが、現在の一橋の学問全体を考えようとしても示唆に富んでいる。その後、一橋大学の研究者数は大幅に増加し、その学問分野も多岐にわたっている。さらに、一橋に入学し、そこで学問の世界に触れ、学者と



して育ってきた教員は全体の一部にすぎない。そうした状況のなかで、一橋学問の歴史、その現在を総合的な視点からまとめることは容易でないが、これは大学の将来を見据えるうえで重要な課題である。そのためにも、まずは、これまでの「学問史」が一橋の学問をどのようにとらえていたのかということをはっきりとしておくことが必要であろう。

「一橋の学問とは」という問題については、すでに、多くの先人が「学問史」のなかでさまざまに論じてきた。そこに示された理解は、今後の学問史編纂にとって示唆に富む内容となっている。その全体をここで論じることは出来ないが、ここでは、多くの一橋人が次の二点を強調していたことを確認しておきたい。

第一に実学の重視である。例えば、上述の文章のなかで、増田四郎は一橋の歴史学の特徴をまとめている。かれは、本学の歴史が商法講習所にその起源があることを強調し、「実際上の必要から発した先学が、研究の円熟とともに到達した独自の境地が、結果的にみて「歴史学」となった」⑤と述べている。つまり、一橋では、現実を理解する必要性から歴史学が生まれてきたのであり、さらに、その学問は実証的方法、「しろうとくさいやり方」、社会学的考察・比較史的方法に支えられていたとまとめている。「学問」のための「学問」ではなく、現実に根差した学問という点は、「学問史」のなかで、多くの人々が強調していたところであった。「学問」のための「学問」への戒めとして、上田貞次郎の有名な言葉、「学者は実際を知らず、実際家は学問を知らず」という言葉も理解できよう。

第二に、上記の点と関わるが、何もないところから、学問を作り上げてきたということへの自負である。与えられた「学問」ではなく、商業学校というその出自から、必要に迫られての学問の創造であった。同じく、『一橋学問の伝統と反省』のなかで、東洋経済事情を専門としていた村松祐次は次のように述べている。

「何よりも根岸博士のような雄大なテーマを、現実のなかから素直に読み取り、しかもこれを長年月の労苦によって学問的業績に客観化する努力をしているか、と行うことである。根岸先生の作られた伝統を固定化せず、と行うよりもそれはそれとして、何も伝統や遺産のない所で、根岸先生がそれを作られた気魄や精励を引きつぐことが出来るか、と行うことである。そして、考えてみると同じような反省は、一橋の学問全体にも、あてはまりそうである。」⑥

ここにある「伝統を固定化せず」という点に関連して、増淵龍夫・渡邊金一も次のように記している。

「学風は若い人々の精神的形成の上で決定的な契機となる。がしかし同時にそれは彼



等にとって、後年そこから抜け出んとして果し得ざる桎梏とも化する。およそ偉大な伝統というが如きものはいずれもかかる本質を具有するものであろう。・・・(一橋の、いや日本全体の歴史研究者に課せられた) 開かれた課題に答えることこそ、私たちが伝統をうけつぎ、伝統を新しい現実の基盤の上につくり上げていく途なのであろう」⑦

村松祐次・増渕龍夫・渡邊金一らの指摘する「創造的な学問」への姿勢が、一橋大学の学問全体を貫いて存在してきたとするならば、その伝統が、現代において、どのように継承されているのか、その問題を検討することは、創立 150 年を記念する学問史のなかでの重要なテーマとなるであろう。

5. まとめ

本稿は、一橋大学における学術誌、学問史の刊行の歴史を概観し、そこから読み取れる点を少々述べたものである。今後、創立 150 周年の準備が進むなかで、大学による本格的な学問史の編纂に着手されるであろうが、最後に、創立百周年記念の『学問史』の「巻頭言」において、当時の宮澤健一学長が記した言葉の一部を引用したい。

「学問史という形で過去と伝統を顧みることの意義は、それをこうした将来への展望に、現在というわれわれの時点で、つないでみせることである。形成か、模索か、胎動か、その差はあるにせよ、ここに展開される一橋学問の点検と吟味によって、明日への方向性が示されていることを期待したい。」⑧

宮澤学長の残した言葉は、創立 150 年を記念する「学問史」の編纂へのメッセージとも言えよう。

- ① 中山伊知郎「創立八十周年記念論集のために」一橋大学一橋学会編『一橋大学創立八十周年記念論集 上巻』(勁草書房、昭和 30 年 9 月) 2 頁。
- ② 中山伊知郎「一橋論叢記念論集に寄せて」『一橋大学創立八十周年記念 一橋学問の伝統と反省』(一橋大学一橋学会) 昭和 30 年 10 月、2 頁。
- ③ 小島慶三「はしがき」一橋大学学園史編纂委員会『一橋の学風とその系譜 1』昭和 60 年 7 月。
- ④ 増田四郎「歴史学」前掲『一橋大学創立八十周年記念 一橋学問の伝統と反省』311-312 頁。
- ⑤ 前掲、307 頁。



- ⑥ 村松祐次「東洋経済事情」、前掲『一橋大学創立八十周年記念 一橋学問の伝統と反省』136頁。
- ⑦ 増淵龍夫・渡邊金一「経済史」前掲『一橋大学創立八十周年記念 一橋学問の伝統と反省』137、150頁。
- ⑧ 宮澤健一「一橋大学学問史に寄せて」『一橋大学創立百周年記念 一橋大学学問史』
(一橋大学学園史編集委員会、昭和57年12月)



表 一橋における学術誌・学問史の刊行
(創立百周年記念まで)

1875 (明治 8) 年 9 月	「商法講習所」が開業する
1884 (明治 17) 年 3 月	「東京商業学校」と改称する
1887 (明治 20) 年 10 月	「高等商業学校」と改称する
1897 (明治 30) 年 9 月	専攻部を設ける
1901 (明治 34) 年 2 月	「ベルリン宣言」が発せられる
1902 (明治 35) 年 4 月	「東京高等商業学校」と改称する
1916 (大正 5) 年 2 月	『創立四十周年記念講演及同祝典記事』(東京高等商業学校)
1920 (大正 9) 年 4 月	「東京商科大学」となる
1921 (大正 10) 年 5 月	研究発表機関誌『商学研究』を創刊する
1925 (大正 14) 年 12 月	『東京商科大学創立五十周年記念論文集』(東京商科大学)
1926 (大正 15) 年 2 月	『東京商科大学創立五十周年記念講演集』(東京商科大学)
1932 (昭和 7) 年 2 月	研究年報『商学研究』を創刊する。この年、『法学研究』(4月)、 『経済学研究』(5月)も創刊される。
1936 (昭和 11) 年 12 月	『東京商科大学六十周年記念論文集』(東京商科大学一橋会)
1938 (昭和 13) 年 1 月	『一橋論叢』を創刊する。(2006年に廃刊となる)
1944 (昭和 19) 年 9 月	「東京産業大学」と改称する
1947 (昭和 22) 年 3 月	「東京商科大学」の旧名に戻る
1949 (昭和 24) 年 5 月	「東京商科大学」を改組し「一橋大学」を設立する
1950 (昭和 25) 年 1 月	経済研究所『経済研究』が創刊される
1950 (昭和 25) 年 10 月	『一橋大学創立七十五周年 記念論集』 (一橋大学東京商科大学一橋学会)
1955 (昭和 30) 年 9 月	『一橋大学創立八十周年 記念論集 上巻』『同 下巻』 (一橋大学一橋学会)
1955 (昭和 30) 年 10 月	『一橋大学創立八十周年記念 一橋学問の伝統と反省』 (一橋学会編『一橋論叢』第三十四巻第四号)
1956 (昭和 31) 年 10 月	研究年報『社会学研究』が創刊される。
1959 (昭和 34) 年 3 月	研究年報『人文科学・自然科学研究』が創刊される
1960/61 (昭和 35/36) 年	各学部・エリアの英文雑誌 <i>Hitotsubashi Journal</i> 創刊
1982 (昭和 57) 年 12 月	『一橋大学創立百年記念 一橋大学学問史』 (一橋大学学園史編集委員会)
1985 (昭和 60) 年 7 月	『一橋の学風とその系譜 1』(一橋大学学園史編纂委員会)
10 月	『一橋の学風とその系譜 2』(一橋大学学園史編纂委員会)
1986 (昭和 61) 年 3 月	『一橋大学学問史』(一橋大学学園史刊行委員会)

